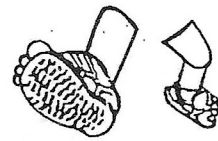


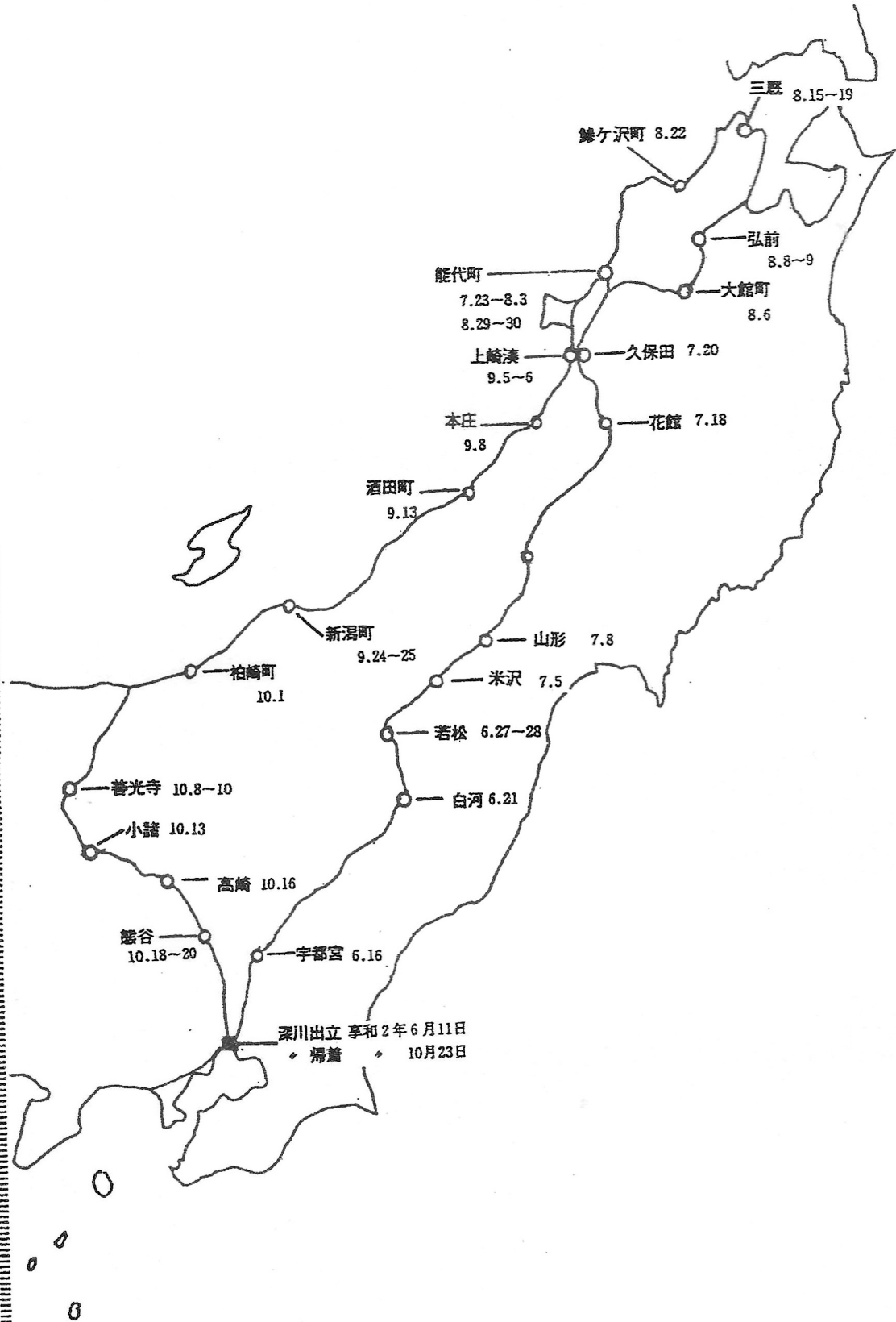
伊能忠敬
米沢街道測量日記
白河～米沢

享和2年(1802) 7/21～8/2



第3次測量行程図

享和2年(1802)6月11~10月23日



斗可給候、泊觸之儀若若松二而我等止宿江可被相返候、以上

まで下る、夫々二代までハ谷合平道なり、八ツ頃二代四丁二着、村役佩刀ニ而上平迄出迎、着後郡役所物書川田乙四郎見舞二

来る會津目見以上 止宿本陳大庄屋二瓶文右衛門會津領 〔是合止宿 每二伺二来る、此夜晴天測量〕

同廿八日 同所逗留、道中測量を調、此日午前曇午後より雨 夜二至ル終夜降ル朝二至ル、万代山ハ 警梯山なり

同廿五日 朝曇ル、五ツ前二三代出立、一里福良二至る、此 間も谷合小坂一ヶ所、福良入口の左右田おほし、五ツ半後福 良二着、雨降出無程止、十八丁赤津二四ツ頃二着、夫々同所 持ノ猪苗代湖水ノ端二至り一覽、猶舟二乗て名所を見ル、七 ッ頃二止宿二帰ル、帰路の白雨段々大雨夜二至る、止宿名主 吉田新右衛門、昼の測器据立雨不測量

同廿九日 朝小雨無程止、五ツ前若松城下出立、左右田兩 山根迄左三里程右二里程もあるべし、山合廣地平坦なり、會 津南方五万四千石之内なり、上高野村入口二而万代山丑二十九分十 二丁程二而下高野村上高野村入口ニテ既山馬頭峯五十八分 分四〇秒 既山惣高五十二分五〇秒 中森臺村 夫々 川沼郡二成、竹内村會津領猪苗代附二万八千石 北方耶 麻郡八万石なりと云、此邊右既岳禁へ近し一里弱と見ル、 其間田おほし、左山際迄二里程もあるべし、田廣見ユ、笠目 村 爰川村村中ハ既岳半 半里余ハ 既岳ハ辰戌と長なり見ユ、万代山ハ既カ 岳ノ後二成不見、セ、ナギ川あり、板橋なり、沼上村此邊既岳 半里余ハ 左山際へ一里半もあるへし、皆田地なり、堂嶋川板橋 長三十二間と云、下へ流て揚川と云越後新潟へ落る、源ハ猪 苗代湖水なり、無程大塩川あり、大塩宿より落ると云、共に 揚川へ落、午時塩川江着、此日午前曇ル、止宿検断栗村平八 別二名主なし、此所の岩郡役所物書服部善内麻上下二而見舞二来 兼帯なりと云、自此會津領界村迄手配するよしなり、若松の塩川江三里、 此夜大雨風尤辰辰風 終夜至朝

六月廿七日 朝曇大ニ涼し給と橋半を着、六ツ後原宿ヲ出 立、山合平道西三田村二三ル、左山際三四丁右田七八丁、夫 々上馬渡村下馬渡村 人家ハ山根二あり、行路も山際万代山ヲ 廿三分 四五秒 赤井入口も同笹山廿四丁と標杭あり、一里半ニして赤井 驛 金堀村 瀧沢村 赤井 一里 若松城下〔松平肥後守居城〕 八ツ頃二着、此日四ツ頃分晴初 段々晴午前分暑 赤井の金堀村の間坂あり、金堀の 滝澤の間も大峠あり、則滝澤峠と云、城下入口の二侍先拂を 成、着後町方役人會津目見以上 池田与五郎見舞二来る、川田乙四 郎も同、此人三代宿の福良・赤津宿、原宿まで止宿見舞二出 止宿本陳問屋検断兼帯 菊地傳十郎 夜測量 七日町

七月朔日 塩川逗留、朝分五ツ後迄風雨雨止テ猶大風巽風 至 夜終夜曇五ツ頃分大雨至曉、堂嶋川ハ耶麻 郡と成ル 同二日 朝曇、六ツ後塩川出立、行路右田畑一里半斗左田 地三里余もあるへし、左右山根迄則會津北方の八万石なり、

止宿本陳問屋検断兼帯 菊地傳十郎 夜測量 七日町

塩川町を通った男たち

【しおかわ塾】

セバスチャン・ピスカイノ

伊達政宗

上杉景勝

伊能忠敬

十返舎一九

高野長英

吉田松陰

輪王寺宮公現法親王

松本良順

大鳥圭介

土方歳三

西郷頼母

飯沼貞吉

“いにしへの夢街道” 米沢街道

…伊能忠敬と塩川の宿…

郷土史の研究が進んで、いろいろな史実が掘り起こされており、町起こしなどに一役をかっておりますが、いままでの研究はどちらかというと明治以降のことがほとんどであり、明治以前のことは少なかったような気がします。この度、明治以前の事で、当町では知られていなかった事がありますので紹介したいと思います。

伊能忠敬^{いのうただたか}が、第3次測量（東北・越後の西海岸等測量）で、塩川町に宿泊しておりますので、調査の途中であります。判明している範囲で、書いてみたいと思います。

伊能忠敬は、第3次測量のために、享和二年(1802)の6月11日に江戸を出発して、132日の日数を費して測量を終えて10月23日に帰っております。第3測量の行程は「第3次測量行程図」によると、奥州街道・白河街道・米沢街道・出羽街道等であった様です。米沢街道の測量では、塩川町に7月28日と29日の2日間泊っております。宿泊したところは、検断名主の栗村平八郎宅です。栗村平八郎は栗村の本家であり、問屋を営んでおり間口が20間と記録されています。現在の場所で見ますと、吉東商店さんのところから津村饅頭店までです。明治6年頃まで栗村本家はここにありました。

ここで検断名主について少し記述してみたいと思います。検断とは大庄屋のことであり、この付近で言えば郷頭であります。（塩川町の例で申し上げますと、金川部落の東條様にあたります。）又、名主とは、関西では庄屋、関東では名主、東北・北陸では肝煎（おやがあっさま）と言っており、江戸時代に郡代・代官の支配を受け、または大庄屋の下で一村内の民生をつかさどった役人であり、身分は百姓です。

それでは伊能忠敬について紹介したいと思います。

伊能忠敬は千葉県九十九里町に延享2年(1745)に生まれます。幼名を三治郎と言ひ、宝暦12年(1762)の年に17歳で、千葉県佐原市の名主・酒造業の伊能家の養子となり、名を忠敬と改めます。伊能家は、当時家業がおもわしくなく、現代で言えば忠敬は、傾いた企業の再建に送り込まれたこととなります。忠敬は家業の復興に努め相当な資産家となります。12倍に商いを伸ばしたと言われており、商才^たに長けた人物でありました。又、村役人を努め、地域のために尽力しております。

50歳で家督を長男の景敬^{かげたか}に譲り、隠居の身となります。隠居の後であります。早くから算術や天文に関心を持ち、村役人として測量などもてがけていましたが、本格的に勉強しようと、寛政七年(1795)に江戸に出ます。江戸で幕府の天文方の役人であった高橋至時^{よしとき}の門下生となります。（この頃より名を勘解由^{かげゆ}と改めます）高橋至時は、忠敬より19歳年下の学者でありましたが、学問には年齢の差などはなかったようであり、近代科学である天文学・暦学を学び、天文観測による測量技術を会得するのです。そして、忠敬55歳の寛政十二年(1800)の4月19日に、全くの私財を投じて蝦夷（北海道）の測量に向かったのです。